

〈よそ者〉教師の教育行為とそのディレンマ

— 両大戦間期における配属将校の教練実践の展開過程 —

石井 周治(京都大学研究生)

1. 本報告の目的

本報告の目的は、両大戦間期における配属将校の教練実践の展開を〈よそ者〉教師の教育行為という観点から分析することを通して、当該期の学校教育の文脈に位置づけることである。具体的には、故郷集団である軍隊を離れ、異郷集団である学校のなかで、学生・生徒の教練指導に携わることになった配属将校たちが、学校〈集団の文化型〉を解釈する過程で、どのように教育行為を構成し、正当化し、自らの存続を図ったのかということを中心に据える。

教育社会学の分野では、これまで教師の社会学研究の一環として、いかに「教師の教育行為」を説明するかということが課題とされてきた(杉尾 1988)。なかでも解釈的アプローチに依拠した研究は社会的相互作用を行為者の解釈過程として捉え、その解釈によって現実が構成、維持されるという前提の下に、教育の教育行為を「状況の定義」による意思決定の結果としてみる視点を提出した。教師の教育行為を単なるフォーマルカリキュラムの伝達過程としてではなく、学校の構造的制約なかで直面する様々なディレンマ状況にうまく対処したり、教師自身が生き残るうえでの戦略として捉える研究がこれである(稲垣 1990, 67-70 頁)。

本報告でいう「教育行為」も、以上のような研究の捉え方に従っていることを予め明確にしておきたい。そのうえで、本来学校集団の成員でないものが、学校内で教育行為を遂行せざるをえない状況に置かれたとき、それはいかなる様相をみせるのか。教育行為主体=学校教師という前提に立っていたがために、これまで先行研究で取り上げられることのなかったこのような視点が、本報告の最も関心を寄せる点である。

さて、学校の成員ではないものによる教育行為の遂行という問題を分析の支柱として位置づけるなかで注目されることは、日本の戦間期から戦時にかけて陸軍に所属する現役将校が男子の在籍する中等教育機関に配属されることになるという事態である。この将校たちを配属将校という。陸軍現役将校の学校配属は、第 1 次世界大戦を面期として新しく現れた総力戦に対応する体制づくりため、青年に軍事予備教育を施す目的で行われたものであった(久

保 1994)。そしてこれまでの配属将校に関する研究は「公教育体制に固有の構造と論理のなかに、これとはまったく異質の軍制の論理と構造がもち込まれる重大な事態」(橋口 1982, 82 頁)というような見解が下されてきている。本報告は、この「異質性」という点にこだわって配属将校の教育行為を分析していこうとするものである。以下では、その分析組みを示す。

2. 学校と軍隊 —〈集団の文化型〉からみた配属将校の社会的地位—

(1) 本報告の分析枠組みとなるのがシュッツ(A. Shutz)の「よそ者」論である。彼の『よそ者』論、及びそこで用いられている中心概念を簡単に解説する。ここで中心となる概念は「集団の文化の型」である。「集団の文化の型」とは、「(フォークウェイズ、習俗、法、慣習、礼儀作法、流行などのように)固有の価値判断、制度、方向づけや指針の体系の全体を示すのに使用される」(134 頁)。それは、物事や仲間たちと調和を保つうえでの「信頼に値する処理法 (recipes)」であり、集団の成員たちに正当な流儀として受け入れられているものである。「文化の型」は、部分的に明晰なものであり、首尾一貫性に欠け、矛盾してさえいるが、集団の成員たちにとっては、相互に理解し合う上で妥当な機会を提供するのに十分な統一性と、明晰さと首尾一貫性を兼ね備えた「知識」としてみかけ上現れる。その意味で「文化の型」は、集団の成員たちの行為の指針や解釈図式として役立ち、面倒な探究の手間を省き、到達することの困難な真理を安楽なわかりきった理屈に置き換え、疑う余地のあることを自明なことで代用するという機能がある。集団の成員たちは、誰もが集団から伝えられたこのような「文化の型」を「今まで通りの考え (thinking as usual)」として共有している。

さて、シュッツは「よそ者」を接近する異郷集団に永続的に受け入れられようとするか、あるいは少なくとも容認されようとする者として定義する。こうしたよそ者にとって、異郷集団の「文化の型」は「避難所ではなく冒険の領野であり、当然の事柄ではなく疑問のある探究課題であり、さらに問題状況を解決するための道具ではなく、習

得し難い問題状況」(148頁)として立ち現れる。その理由は、よそ者が異郷集団の「文化の型」が形成されてきた歴史的伝統に関わっておらず、故郷集団内で通用していた「あたりまえの想定 (of course assumption)」(138頁)が成り立たないからである。そのため、故郷集団の「文化の型」は、異郷集団の「文化の型」を解釈するうえで不適切であり、解釈の指針には成り得ないのである。この意味で異郷集団の「文化の型」は、よそ者にとって「習得し難い問題状況」として立ち現れることになる。

(2) 以上でみたシュツツの議論を、本報告のなかに位置づけてみよう。配属将校がよそ者であることの指標は、なによりも彼らが陸軍に所属する現役将校である点に求められる。一般に現役将校とは、軍事力の編成・装備、訓練、戦闘の作戦指導など「暴力の管理」と呼ばれる専門技術や、社会の軍事的安全保障の達成に「責任」を有する軍事プロフェッション (Huntington, 12 - 18 頁, 1964) である。しかし一端、配属将校として管轄の異なる学校に陸軍から「配属」されれば、彼らは否応なく学校という異郷集団のなかで容認されねばならない立場に置かれる。このような配属将校の立場そのものが、彼らのよそ者たる所以を示唆しているといえよう。

配属将校をよそ者として捉えることができるのであれば、配属将校にとって異郷集団である学校の「文化の型」と、故郷集団である軍隊の「文化の型」を理念型として措定することができるはずである。具体的に学校と軍隊の二集団間にみられる「文化の型」の違いは、配属将校对学校教員関係及び被教育者の様態、この二つの観点から理解することができる。

まず対教員関係に関しては、配属将校が畑違いの学校教員の中に加わって、果して調和が保ち得るのかという問題に対して、学校教育関係者側から出された見解が示唆的である。すなわち、軍隊では上官の指揮命令に背くことなく、その指揮命令の下に「全体が動く仕組でなければならぬ」ことを重視するが、学校では「その事情が大に違ふ」という。学校では、教員は校長の統御を受けねばならぬが、大体において各教員が「自己の考へを十分に働かせて、融和協調して任務に当る」ことを重要視する。軍隊では「専制的行動」が支配的であるのに対し、学校では「融和協調」が支配的なのである。つまり、軍隊と学校とでは「空気が自ら異つて」(以上、嘉納 1925 年 3-4 頁) いると意味づけられていた。

この点に関しては、陸軍省が配属将校のために発行した『業務指針』のなかの対教員関係に関す

る事項の記述からも確認できる。このなかで学校長に対しては、教練指導に関し「校長ノ指揮監督ヲ承ケテ服従ノ道ヲ厳守スベ」(3頁) きことが示される一方で、同僚となる学校教員に対しては「軍ニ於ケルガ如キ厳呼タル命令系統ヲ存スルモノニアラサルヲ以テ命令権云々ノ考ヲ抱クコトナク技量ト徳望ト協調ノ精神ヲ以テ臨ム」(89頁) べきことが示されていた。このようなことが記述されること自体、明らかに軍隊と学校との「文化の型」の相違が、陸軍側によっても意味づけられていたことを物語るものであろう。

一方、被教育者の様態については、配属将校が故郷集団である軍隊で教育対象としてきた兵卒と、新たに教練指導の対象となる学生・生徒との違いを指摘できる。その違いは、文相・岡田良平が配属将校に対して述べていたように、学生・生徒の「多くは心身発達の途上にあるものでありまして、既に丁年に達しました兵卒とは其の事情を異にして居ること且学生生徒の体質は強弱種々交はつて居りますので、一定の嚴重なる検査を経て入營し来つた所の兵卒と同一視すること」は出来ない(32頁) という点にあった。心身、殊に壮健で均一な身体をもつ兵卒と学生・生徒とでは、その様態が大いに異なるというわけである。これは陸軍側も承知するところであり、『業務指針』では上述の違いに加え、「学生生徒ノ大部ハ其ノ思想最モ動揺変化シ易キ時期ニ在ルコト」、さらには「智的素養」が兵卒とは異なること(15頁) などが、学生・生徒に臨む際、配属将校の最も注意すべき点として示されていた。

総じていえば、軍隊と学校、それぞれにみられる「文化の型」の特徴は、前者が専制的行動を重視し、被教育者の様態が均一化されているという点でリジッド、それに比べ後者においては融和協調が重視され、また被教育者の様態が不均一であるという点で相対的にルースということが出来る。こうした特徴の相違ゆえに、配属将校の故郷集団である軍隊のリジッドな「文化の型」は、異郷集団である学校のルースな「文化の型」を解釈するうえでは不適切であり、その指針とはなり得ない。よそ者である配属将校にとっての危機とは、以上のようなかたちで自明の解釈図式が無効となる状況に置かれていることを意味するのである。

(以下、分析結果、引用文献および資料は当日配布します)